

香川県教育委員会事務局
保 健 体 育 課 長 殿

学 校 名 三木町立氷上小学校
学 校 長 名 小 笠 原 学

令和 2 年度 オリンピック・パラリンピック教育実施報告書

I 事業実施前の課題

- ・ 「I 'm POSSIBLE」を活用したオリパラ教育は行っているが、実技を行うことができておらず、実感を伴った学びとなっていない。
- ・ 6年生という発達段階もあり、苦手なことには失敗を恐れて挑戦をしつづけない学級の実態がある。

II 具体的な取組み

1 活動名 (事前学習) : パラスポーツについて調べよう

(1) 日 時 : 令和 2 年 10 月 26 日 (月) 9 : 25 ~ 10 : 20 (調べ学習)

(2) 対象者 : 第 6 学年 36 名

(3) 活動概要及び工夫点 (総合的な学習の時間で実施)

「I 'm POSSIBLE 第 1 弾」の「パラリンピックってなんだろう？」を使い、子どもたちの興味・関心を高めた後、パラリンピック公式HPを使い、調べ学習を行った。「I 'm POSSIBLE」の映像資料を導入で使うことで、主体的に調べ学習を行う子どもたちの姿を引き出すことができた。また、オリパラスゴロクを行い、楽しみながらオリパラに関する知識を身につけた。

(4) 活動の様子



【公式HPを使い、調べ学習をしているところ】



【オリパラスゴロクをしているところ】

2 活動名 (事前学習) : ゴールボールを体験しよう。

(1) 日 時 : 令和2年10月29日 (木) 13:10~14:50

(2) 対象者 : 第6学年36名

(3) 活動概要及び工夫点 (体育の時間で実施)

「I'm POSSIBLE 第1弾」の「ゴールボールをやってみよう」を使い、ルールの確認を行った。映像資料の中に、コートやボールなどの簡単な作り方も紹介されていたため、児童と一緒に作ることができた。自分たちで、体育館に凹凸をつけたラインテープを貼ることで、視覚障害者の方がどの程度の凹凸が必要かを考えながら、コートを作ることができた。授業では、いきなりゲームをするのではなく、目隠しをした状態でボールを止める練習を行った。そうすることで、恐怖心を和らげてからゲームに移ることができた。ゴールボールを体験することで、ゴールボールの楽しさや難しさを実感していた。

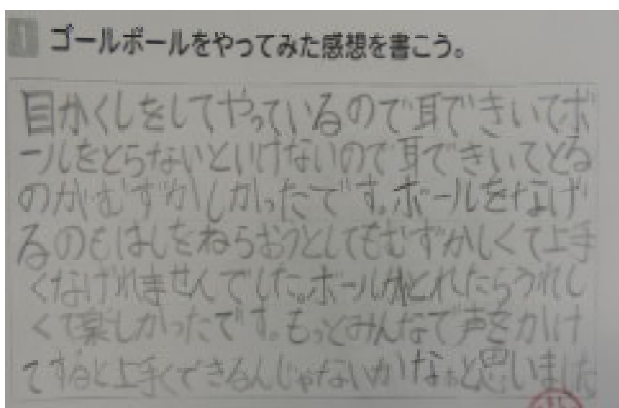
(4) 活動の様子



【ゆっくりなシュートで練習をしているところ】

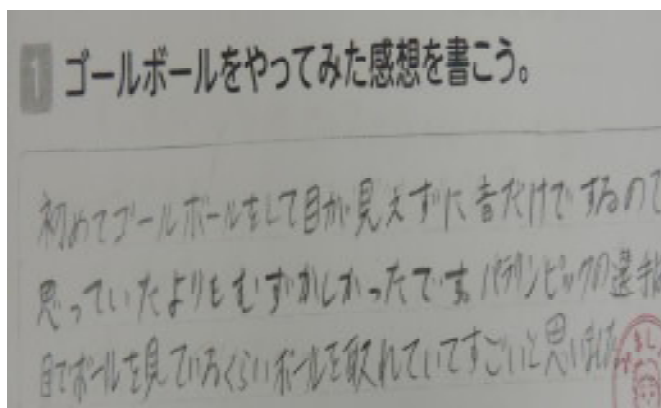


【ゴールボールの試合をしているところ】



目隠しをしてやっているのので、耳で聞いてボールをとらないといけないので、耳で聞いて捕るのが難しかったです。ボールを投げるのも端を狙おうとしても難しくて上手に投げられませんでした。ボールが捕れたら、うれしくて楽しかったです。もっとみんなで声をかけてすると、上手くなるんじゃないかなあと思いました。

【子どもの振り返り① (楽しさや難しさを実感)】



初めてゴールボールをして、目が見えずに音だけでするので、思ったよりも難しかったです。パラリンピックの選手は、目でボールを見ているくらいボールを捕れていてすごいと思いました。

【子どもの振り返り② (選手の技能の高さを実感)】

3 活動名（中心学習）：パラアスリートにインタビューをしよう。

- (1) 日 時：令和2年11月 9日（月）10：30～11：15（安達 阿記子選手）
令和2年11月16日（月）10：30～11：15（田口 侑治選手）
- (2) 対象者：第6学年36名
- (3) 活動概要及び工夫点（道徳の時間で実施）

本校を含む3校合同でパラリンピアンへのオンラインインタビューを行った。オリパラ教育と総合的な学習の時間の学習をつながりをもたせた単元を設定した。インタビュー内容は総合のテーマ「生き方を学ぶー自分に夢につなげようー」に関するパラリンピアンの生き方への質問とゴールボールに関する質問をした。3校合同で行うことで、他校からの質問に新しい気づきが生まれたり、他校の取り組みを知ったりするよい機会となった。

(4) 活動の様子



【安達選手にインタビューしているところ】



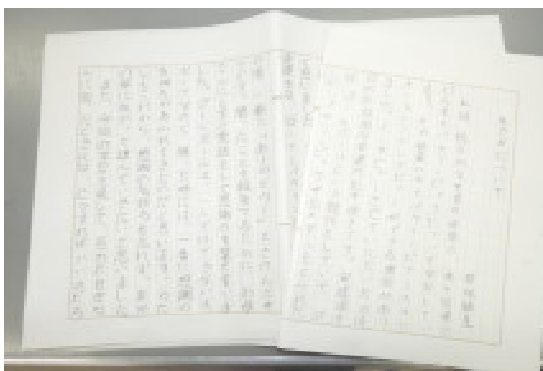
【他校のインタビューを聞いているところ】

4 活動名（事後学習）：自分の夢につなげよう

- (1) 日 時：令和2年12月 4日（金）8：10～9：15 氷上っ子人権を考える集い（人権集会）
- (2) 対象者：第6学年36名
- (3) 活動概要及び工夫点（総合の時間で実施）

パラアスリートへのインタビュー後に、総合の時間を使って、これまでにインタビューした方々（シンガーソングライター、手話通訳士、パラリンピアンなど）の話聞いて、これからの自分の生き方にどう生かしていきたいかを作文にまとめた。その作文が「氷上っ子人権を考える集い（人権集会）」の作文発表に選ばれ、パラアスリートへのインタビューを通して学んだ、パラスポーツのすばらしさと共生社会を実現していくことの大切さを全校生に訴えた。

(4) 活動の様子



【インタビュー後の作文】



【テレビ放送を使っでの発表の様子】

Ⅲ 成果と課題

- 事前のアンケートでは、オリンピック競技について知っている児童は多かったものの、パラスポーツの認知度は低かった。本実践を通じて、パラスポーツについての知識や興味・関心が高まった。
- パラスポーツを体験することで、映像で見るだけではわからないパラスポーツの楽しさを味わうことができた。また、体験後に、再度パラアスリートの映像を見たり、パラアスリートへのインタビューをしたりすることで、パラアスリートの技能の高さを実感することができた。
- 「共生」について学んでいく中で、人によって得意・不得意があり、それを認めたり、補い合ったりしていくことの大切さが浸透していった。それに伴い、苦手なことにも友だちに助言をもらいながら、挑戦していく姿が見られるようになった。
- 総合的な学習の時間とつながりをもたせたことで、単発のオリパラ教育ではなく、「生き方を学ぶ」という単元を通した課題をもって学習を進めることができた。
- △ オリパラ教育として、単発で行うのではなく、単元を組んでの実践を行う必要があると考える。そう考えた時に、学校の実態に合った単元を組み、学習を進めることや学年でそろえて学習を進めていくことが難しかった。
- △ 今回は、3校合同でのインタビューを行ったため、連絡調整に時間がかかった。しかし、回数を重ねるごとに時間は、短縮されていったため、慣れることで時間短縮ができると感じた。